

序にかえて

～ 1260 年前の国際交流 ～

女子栄養大学教授 武 藤 志真子

中秋名月の夜に行う唐招提寺の「観月讃佛会」に参加した。金堂の正面三つの扉が開放され、その一つ一つの戸口の中にライトアップされた仏像が輝きを放っている。今年は、月が地球に接近して通常よりも明るく大きく輝くスーパームーンの満月がみられ、鷗尾を乗せた金堂のシルエットが幻想的であった。ご存知の通り唐招提寺は唐の高名な僧であった鑑真和上が、5回の渡海失敗で盲目になりながらも、6回目の渡日により754年に奈良にたどり着いて開いたお寺である。石田現執事は「唐招提寺はリサイクル寺」と言われていたが、土地も建物も仏像も他所から移されたものが多い。例えば金堂の後ろに建つ講堂は平城宮の朝集殿を移築したもので、天平時代の宮殿の唯一の遺構である。讃佛会では月明かりの中で大和上を奉安する御影堂前庭が1年に1度開放される。この御影堂も大和上1200年御忌（1962年）に奈良公園から移築（元は興福寺旧一条院宸殿）された堂で、大和上の生存中に作られた国宝の御影像が厨子に収められている。讃佛会の夜には、御影堂に東山魁夷画伯が12年かけて描いた海・中国の風景・水墨画の壁画・襖絵を庭から見るができる。渡海した時の荒々しい海から穏やかな海辺へと青の色を変えて描かれている海や筆者も訪れたことがある桂林や黄山の風景も描かれている。

鑑真は第9次（733年出発）の遣唐使派遣で唐に渡った留学僧から、当時の日本仏教界で最も必要であった「戒律を伝法して欲しい」という懇請を受けて日本への渡航を決意した。これは井上 靖の「天平の薨」に詳しい。当時の唐は玄宗皇帝の時代で、長安を首都とする世界で一、二を争う大国であり先進国であった。8世紀の世界は、イスラム帝国のアッパース朝、東ローマ帝国、カール大帝のフランク王国が勢力をもっていたが、長安はアッパース朝に滅ぼされたペルシャの人々や文物など西方文化も流入している国際都市でもあった。遣唐使は唐との安定した関係を築くための政治・外交を中心的な

役割とする使節団であると同時に、海外情勢を知り、先進技術や仏教の経典を収集するという文化的、宗教的な目的も兼ねていた。唐は留学僧の長年にわたる滞在費や勉強費を支給しており、唐側からみれば国際交流というより上から目線の国際協力であろう。

鑑真が唐からもたらした請来品は、食料や日用品、経典・典籍、仏像、仏具・調度、香料・薬物など多種に渡り、王羲之の書なども伝わった。鑑真は仏教の高僧であると同時に医療の心得もあり、高位高官とも付き合いが広く金銭的援助も得るなど実務的能力も高かったといわれる。鑑真が在世中には唐招提寺には約3千人の僧がいたという。

日中国交回復の8年後の昭和55年に唐招提寺の国宝の鑑真和上坐像が、唐招提寺81世森本長老の尽力により、和上生存中にはついに帰国できなかった中国に里帰りをした。船で生誕地の揚州に帰国した坐像に仏教界はもちろんのこと、民衆も熱狂的に歓迎し、沿道には50万人の人々が迎えたという。その30年後の平成22年に、上海万博展示の帰りに東大寺の和上坐像が車で揚州に里帰りし、様々なセレモニーが行われた。1260年たった今も鑑真和上は日中の国際交流と友好に寄与されている。

平城京は長安の四分の一規模だという。「天平の薨」の一節に次のような文がある。「20年ぶりで故郷の土を踏んだ普照の目には、故国の自然が小さく見えた。山も、川も、森も、平原も、そして平原に散らばる人家の聚落も、何もかもがひどく小さかった。空気は澄んで美しく、大陸のそれと比べると微かに香気をもっていた。」これは中国から帰国したときの筆者の実感でもある。大地の規模も歴史の長さも人の数も中国と日本は異なるが、多くの中国文化を日本が吸収してきたことは間違いがない。隣人に対する尊崇の念を持つことが友好の基本ではないかと思う。